

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第87回

利己と利他が共存するシビックテック

● Code for NAGAREYAMA、小学校4年生以上夏の居場所「ナツイエ」、株式会社 Colabo-ya
白澤 美幸（しらさわ みゆき）

シビックテックが話題にのぼると「利己的(ビジネスなど)か利他的(ボランティアなど)か」という議論がいつも出てきます。

この話を進める前に、まずは筆者の経歴を簡単に紹介します。Webソリューション、ソフトウェア企業での勤務を経て、Code for NAGAREYAMAという千葉県流山市で地域の課題をICTで解決する任意団体の代表をしています。また、自身で㈱ Colabo-yaを2018年に立ち上げています。既出の「シビックテックは利己的か利他的か」という議論について、筆者の結論から申し上げると「利己と利他が共存する」です。それは、筆者が会社を立ち上げるきっかけにもなりました。

シビックテックを始めたきっかけ

2013年当時、筆者は2人目の子どもが生まれ育体中でした。都内のビジネスセミナーに通うこともなかなかできず家の中で悶々としていた中、Webで見つけたのがCode forという活動でした。「地域の課題をICTで解決する」というキャッチコピーに、自分の知識をアップデートできるのではないかと飛びついたのであります。その後、この活動がシビックテックという領域であることを知りました。

筆者は仕事を中心に成果を上げること、自分の知

識を増やすことなど、非常に利己的な理由でCode for NAGAREYAMAの代表になることを決めました。Code for NAGAREYAMAでは流山市の保育園マップの作成、Wikipediaタウン^{注1}、森の生態系のマッピングなどの活動をしていました。地域の課題をもっと広く解決しようと、地域の人と課題について話し合うアイデアソン^{注2}も始めました。

ところが当時、地域とIT(当時はICTでなく)がまだまだ身近でなく、アイデアソンをすると「IT? そんなのまだ早いよね」「使えないよね」「やりたいならやったら」という声が散見されました。当時シビックテック界隈で活動をされていた方は、少なからず同じような経験をされたと思います。

地域の理解者が少ない心が折れてしまいそうな活動に聞こえますが、シビックテックの活動をしている人々はSNSなどを利用し時間的・地理的制約を超えてつながり、Code for Japan Summit^{注3}やCIVIC TECH FORUM^{注4}など全国的なイベントを催し活動をシェアしています。トレンドや課題をシェアしながら自分たちをアップデートできるので、活動の整合性やモチベーションを保つことができます。

Code for 地域と地域課題とのジレンマ

Code forの活動でブリゲード登録^{注5}をするには

注1 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ウィキペディアタウン>

注2 <https://sites.google.com/site/devreljp/Home/hackathon-in-a-box/ideathon-guided>

注3 <https://summit2018.code4japan.org/>

注4 <https://2018.civictechforum.jp>

「Code for ○○」という表記をします。「○○のためにCodeを書く」という意味が名称に含まれており、現在でこそ○○は概念的、物質的なモノも当てはめられるようになりましたが、基本はエリア(地域)を指し示すように表記をしています。

それは、「地理的条件によって人々の課題がある程度分けられる」という考え方から来たものだと思われ、各地域のCode forも多くは地理的条件(一般的に行政区分)で分けられており、行政との対話においてある程度の影響があります。

「シビックテックは利己的か利他的か」という問いをこの文脈に当てると、地域の課題を住んでいる市民が自ら解決するという「一人称課題解決=利他利己共存」の理論が成り立ちます。

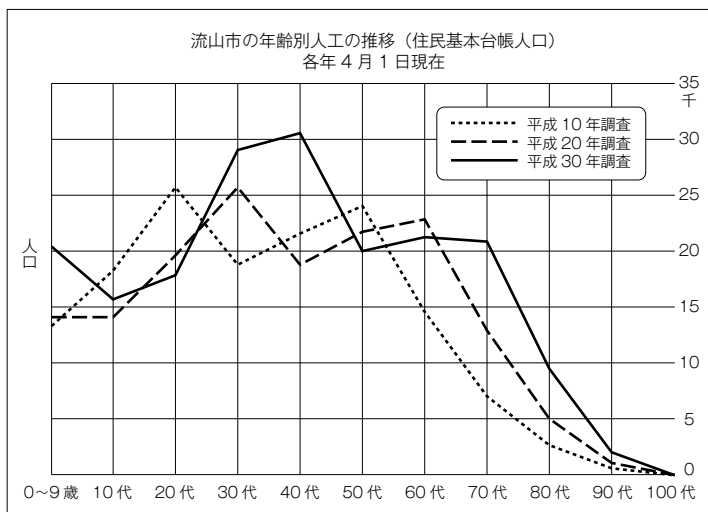
しかし地理的条件が合致していても、自分が課題保持者であり解決することにより直接還元されるという「一人称課題解決」ではない場合もあります。筆者の住む子育て世代急増中の流山市^{注6}においても、全体の人口から考えると「子育て」という課題は一部の人の「利己」となっています。

実際、「地域の課題をICTで解決する」という目的に対して、一部の人の課題を解決することが果たして合っているのだろうか、という議論がCode for NAGAREYAMAの活動でも起きました。

地域の課題を尖らすことは戦略的に良案となる場合が多いのですが、一部の人の課題を解決することは公平性に欠けるのではないかと考えられる場合もあるかと思います。個人的には、少子高齢化が進むなか、各自治体は特色をきちんと出していくことにより、財源など自治体維持に必要な資源を獲得していく必要があると強く感じます。

参画した人もメリット(利己)がある活動には、消

▼図1 子育て世代が急増する流山市



耗(利己なし)が減り、課題当事者に自分になる(利己利他共存)ことで課題を絵空事にせず、本質をとらえる解決方法が出やすいという側面があります。そもそも筆者は、地域の活動に利他と利己が同居していないこと自体に問題があると思っていますが「地域の課題をICTで解決する」という命題は、より利他的に行動してしまう危険性をはらんでいるのが事実です。「地域を良くするために何かをしよう」と考えている状態で、地域差のない一般的な「地域の課題」を解決しようとするデザイン思考でいうところの「制約のない状態=良いアイデアが生まれにくい」状態となります。

学びの場としてのシビックテック

(Japan.recovering)
we.hack();

Code for NAGAREYAMAでは、現在「学びの場」の提供をすることで広義のシビックテック活動をしています。ハック(ものを作る)を主軸としたシビック活動とは異なりますが、「社会課題をトレンドの技法を使ってアイデアで解決する」スタートアップのような新しいモノやコトを起こすために必要な環境を使って、学びながら地域課題を解決する

注5 Code for Japanが提供する連携プログラムに参加している各地のコミュニティを、Brigade(ブリゲード)と呼んでいます。

注6 流山市住民基本台帳 <http://www.city.nagareyama.chiba.jp/information/1008422/1008423/1008453.html>

活動をしています。

この活動を「シビックデザインスプリント」と名付け、

- ① 地域（自治体）の課題を一人称に落とし込み、尖った課題へと落とし込む
- ② 現実化できる条件を考え、アイデアをストーリーテリングで作る
- ③ 現状の地域（自治体）課題とアイデアで解決できる課題とに乖離がないかデータ（オープンデータほか）を使って検証する
- ④ アンケート調査により、より効果的なコンテンツの検証を行う
- ⑤ 行政への提案および連携の方法を検証する

といった内容で進めています（図2）。

より効果的なコンテンツの検証の際に使用する評価の方法は、1) 自己の課題性、2) 自治体の特色、3) 他者への影響力と定義しています。これは非常に効果的な評価方法だと実感しています。

実際に地域の市民が集まり、この技法を利用してCOG2018（チャレンジ！！オープンガバナンス^{注7}）という自治体が抱える課題と公開データや資料を提示し、市民がアイデアを出すというワークショップを行いました（写真1、写真2）。

この会では、地域の課題を尖らせるために、課題

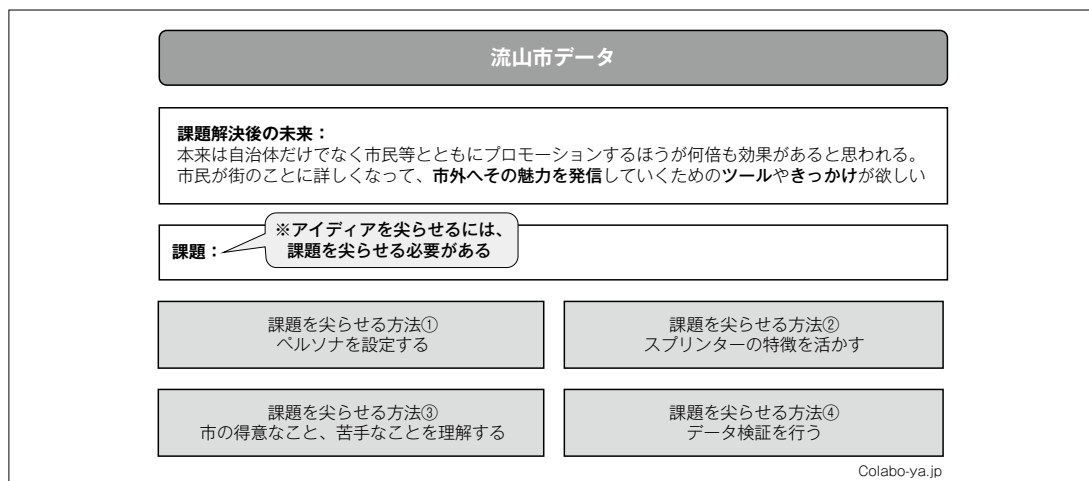
背景の情報収集をし、自分たちや自治体の強み（得意なこと）は何かを洗い出し、それらを掛け合わせてアイデアを作るというワークショップを開催しました。実際にデータで検証をし、街頭アンケートによる意識調査をするなど合計で4回のワークショップとなりました。まとめた資料をもとに、地域の企業と市民が自治体のサウンディング型市場調査^{注8}にて提案をする予定です。

マッシュアップしてシーズを見つける

シビックテックの活動は、従来の地域活動とは特色が少し異なりビジネスに近いツールや知識を要します。そのため「ビジネスチャンスやスタートアップのネタがあるのではないか」と興味を持たれた方も少なからずいらっしゃると思います。既出の「シビックデザインスプリント」においては、正しくそのネタを探す好機となり得ます。

地域の課題を解決するにあたり、アイデアを出していくともう1つの壁にぶつかることがあります。課題が尖っていても出るアイデアが平均的な場合です。アイデアソンなどに参加すると「こうあるべき」という概念が先行し、尖ったアイデアがなかなか出ないが合意形成はできる、という場面に出会うこと

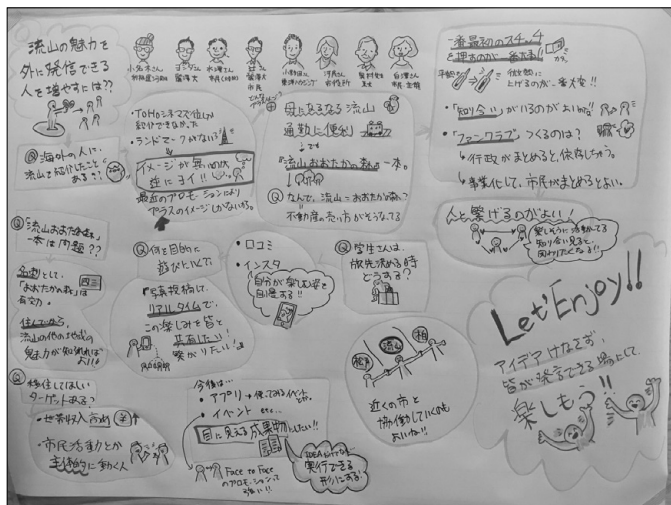
▼ 図2 シビックデザインスプリントの説明資料



注7 チャレンジ！！オープンガバナンス 2018 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/padit/cog2018/>

利己と利他が共存するシビックテック

▼写真1 ワークショップ開催時掲示物



▼写真2 ワークショップ開催時の写真



も多いかと思います。

そこで、「シビックデザインスプリント」では参加者の特技や不得意なものをふまえ、持っているスキルと地域の良いところを掛け合わせてできるものを模索しています。そのため、出てくるアイデアは具体的であったりごく一部の人に支持されたりする可能性を含みます。

課題当事者のスキルと地域の良いところをマッチアップ(組み合わせる)することで、平均的ではないものの特色のある解決方法が出てきます。

他の地域でアップグレードする

シビックテックの業界でさらに起こる課題としては、地域を超えて課題解決方法を展開することによ

り解決方法が平準化してしまうというものです。基本的に、地域の課題にスポットを当てているのでほかの地域での焼き増しは難しく、良案だと思って適応しても形骸化してしまうことはよく見受けられます。「新しさと質の高さはトレードオフ構造にある」^{※9}とNews Picksの番組で予防医学者の石川善樹さんがお話しされていたのを聞きました。が、シビックテック界限において地域でスタートアップをする場合、新しいコト起こしが大半となり、質の高さを提供できずに安価になってしまうという傾向があります。

2019年に、千葉県ではシビックテック人材や場の交流を増やすことを目的にCivic Tech Zen CHIBAという会を作ります。それによって他地域へのアプローチが容易になることと、他の事業間でのコラボレーションが生まれるよう構想しています。こういった、他の地域へ違うアプローチで検証済みの良質なコンテンツを提供し合うことにより、広域での事業展開も望むことができます。

地域でスタートアップ

上記のようなシビックテックの活動が利己的だ
という意見もあります。ですが地域の課題を解決する
事業というのは社会起業^{※10}的な概念と同じであり、
利己と利他が共存しています。筆者が起業をした理
由はまさしくそれが社会起業に該当すると考えたか
らです。

広義の意味ではありますが、筆者が起業したのもシビックテックと言われる活動が始まりであり、シーズを見だし事業化した経緯があります。利己と利他が共存するシビックテックへの、1つの道筋を付けることができればと考えています。SP

注8 サウンディング型市場調査とは <http://www.city.nagareyama.chiba.jp/information/1006912/1006966/1006988/1006989.html>

注9 NewsPicks WeeklyOCHIAI <https://newspicks.com/live-movie/240/>

注10 社会の課題を事業により解決すること。

参考書籍：駒崎弘樹 著『社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門』PHP研究所、2015年